「教育実習体験レポート」

[公立中学校　国語]

〇〇中学校での三週間の実習は、９月１日金曜日の始業式から始まった。二週目に授業見学、三週目と四週目に授業実習をさせていただいた。学級は６３回生３年３組に入った。授業実習は３年生全ての学級で行い、国語の授業を６コマ×３クラス、道徳の授業を１コマ×２クラス、計２０コマの授業実習を行った。単元は、国語が「語彙を豊かにしよう」にて慣用句、ことわざ、故事成語を学習するものを２コマ、「人との関わりの中で、新しい価値を創造する」にて鷲田清一の『誰かの代わりに』を読むものを４コマ。道徳が、主題名を「本当の思いやり」、内容項目が思いやり、感謝にあたる「電車の中で」という教材文を扱った。

実習校の生徒は、大変人懐っこく、素直で、大人と関わることを好む生徒が多いと先生方から伺った。６３回生に関しては毎年国語の実習生を迎えているらしく、実習生に対して協力的な姿勢がこれまでの２年間で築かれているということだった。また、年々、中学生が幼く、素直で正直な様子になっていると先生方は口を揃えておっしゃった。

実習の期間に最も実感したことは、指導者の準備量、熱量は生徒に伝わるということだ。

授業が始まるまでに何度も指導教官に指導案を添削してもらい、一つのクラスで授業をしては反省会をして改善策を練ってから次のクラスへ向かった。改善を繰り返すことの大切さと面白さを感じ、これを何十年も続けていくことが授業をつくるということなのだと思った。板書練習も何度もした。生徒は字が綺麗だと言って喜んでくれた。

授業のなかでは考えること、そしてそれを書くことについて繰り返し伝えた。語彙の授業では学んだ語句を使って例文を書く活動のときには、「書けるよ。書こう。書いてみよう。」と言った。論説を読んで自分の意見を書く授業では第１回目に、その時の考え、感想を素直に書き残すことの大切さを伝え、教材文の読解の際に都度自分はどう思うか、身近なことを例にしながら考えてもらった。なかなか書き出せない生徒には声をかけ、会話の中に漏れ出てきた考えに対して肯定的な態度を示し、自信を持って書けるように促した。班活動でついふざけてしまう生徒には「〇〇さんが真剣に取り組めるのを、知っていますよ」と信頼を基に声掛けをしようと心がけた。結果として、語彙の例文を全ての生徒が複数自分で考えて書くことができ、論説の授業では、最終回で時間いっぱいまで生徒が感想や考えを書く姿を見ることができた。ノートを回収して見てみても、その内容はとても濃いものが多かった。

実習最終日にいただいた６３回生全員からのメッセージ集には、慣用句を使って書いてくれるものがあった。また、ある生徒からは「僕は国語が苦手です。いったい国語で何の力を試されているのか、何を学んでいるのかも分からずとまどっていました。今は国語が何か分かった気がします。『誰かの代わりに』の先生の授業でどうしてその答えまでたどりついたかや、自分ならどう思うかなどの考える時間がたくさんありました。その時に国語は「考えること」だという気がしました。」というメッセージをもらった。とても嬉しかった。

授業で紹介した本を図書館で借りる生徒や、紹介のために持参した本をめくりに教卓へやってくる生徒もいた。「生徒のために」「授業に少しでも感動があるように」と準備をすることが届く喜び、授業者自身がそれに感動を覚える感覚を知り、教壇に立つ魅力を実感した。

今後の課題は、生徒が時に背伸びでき、時に脱力し甘えられる信頼関係を築くことではないかと思う。指導教官から最近生徒が少し大人っぽくなったと伺った。下の名前で呼ばれてきた生徒を全員名字にさん付けにしたことや、実習生に親切にしようという経験が少しでもそうさせたのかもしれない。実際の教員と生徒の関係は短いようで長期戦だ。今回の実習では見られなかった生徒のどんな姿をも支えられる指導力をつけなくてはならない。